

## きらきら

来週からいよいよ三月。本当に早いもので、学年通信もいよいよ3月号になります。

さて、卒業までの日数は17日になりました。登校するのはさらに少なく、11日間しかありません。

皆さんの中には、受験を控えた人もいれば、クラスメートとの時間を大切にしている人や、高校生活を今か今かと待ちわびている人もいることかと思います。

3年間という時間の尊さ、早さをかみしめて、仲間と共に過ごしたこの嘉楽中学校での生活を思い返してほしいと思います。

1年生、ドキドキしながら、入学式を迎えた日、先生たちは皆さんの入学を心待ちにしていました。学校の前で大きな声で挨拶をし登校してきた皆さんは、今より背が随分小さく、ブカブカの制服姿がとても可愛らしかったです。初めての校外学習は、竜王子供の国でのカレー作りでした。各班に分かれて火をおこすところからはじめ、みんなで楽しくカレーを食べたのがとても楽しかったですね。

文化の部では、ダンス、手話、ストンプなど、全員が舞台に立ち、「なかま」の絆を深めることができました。学年合唱の「大切なもの」は大切なものとは何かを合唱を通じて一生懸命訴えている君たちの全員の姿がとても感動的でした。

2年生になってからは、生き方探究チャレンジ体験を通じ、社会にでて働くことの楽しさ、仕事のやりがいを感じてくれたのではないのでしょうか。保護者の方々の苦勞を学ぶことができたと思います。文化の部では、チャレンジ体験学習の発表を行いました。そして、3年生になる直前にまさかの休校になり、部活動の試合や行事が中止になりました。

3年生になってからも、5月までの休校期間がありました。修学旅行では、沖縄方面を計画していましたが、信州長野方面へ行き、「時間」「空間」「仲間」を大切にすることができました。

合唱コンクールにおいても、各クラス本当に一生懸命に取り組み、一人ひとりが主役のリーダーとして学校を引っ張ってくれました。

体育大会では、全員リレーを行い、順位関係なく、一人一人の頑張りを讃えあう姿に心から感動しました。

この学年のいいところはたくさんあります。でも、その中で3つ先生が思ういいところを紹介したいと思います。

1つ目、勉強や部活、習い事に一生懸命取り組んだこと。(結果よりもプロセス)

2つ目、行事で全員が一度は舞台に立ったこと。(経験を通じて)

3つ目、仲間を大切にし、素直でまっすぐなところ。(内面的な君たちの姿)

この3つが先生の思うみんなの共通していた、いいところだと思います。

紹介した3つ以外のいいところの他にも、この3年間、学校通信ライオンハートを通じ、みんなのいいところをたくさん見つけることが出来ました。

この学年のメンバーと出会えたことに感謝の気持ちを忘れずに、みなさんのこれからの頑張りを期待しています。みんな本当にありがとう。

最後に、先生のとても大好きな話を紹介します。

## 「先生と生徒」

先生が5年生の担任になった時、一人服装が不潔でだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は、少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。

ある時、少年の一年生の記録が目にとまった。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強も良く出来、将来が楽しみ」とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。

二年生になると「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪くなり疲れていて、教室で居眠りする」後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる」とあり、四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力を振るう。」先生の胸に激しい痛みが走った。

ダメと決め付けていた子が突然、悲しみを生き抜いている生身の人間として、自分の前に立ち現れてきたのだ。

放課後、先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？分からないところは教えてあげるから」少年は初めて笑顔をみせた。それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で、少年が初めて手を上げたとき、先生に大きな喜びが沸き起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押し付けてきた。後であけてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていた物にちがいない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくやうに飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！今日は素敵なクリスマスだ」

六年生では少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。「先生は僕のお母さんのようです。そして今まで出会った中で一番素晴らしい先生でした。」

それから六年、またカードが届いた。「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することが出来ます。」

十年を経て、またカードがきた。そこには先生に出会えた事への感謝と、父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。「僕はよく五年生のときの先生を思い出します。あのまま駄目になってしまう僕を救って下さった先生を神様のように感じます。医者になった僕にとって最高の先生は五年生の時に担任して下さいました先生です」

そして一年。届いたカードは結婚式の招待状だった。「母の席に座して下さい」と一行、書きそえられていた。

先生は涙が止まらなかった。

3年生へ